

山村再生と環境保全運動

—「自由文化空間」と「よそ者」の交錯—

松村 和則

(筑波大学)

環境社会学の研究は、近年、生活破壊・環境問題の研究から「生活」の保全へと深化しつつある。「民衆の生活実践と日常の価値観と知識に視点を置く」立場を一步進めて、人々の「生活の場」へ自らの身体を投入し、実践を志向した「よそ者」として自らを客観化する視座が求められている。

鬼頭の「よそ者」論は、方法論的客観主義に固執するがゆえに「生活」の論理に迫るという現代的課題を捉えきれないと考える。本稿の「身体に備わった自明性をあてにし」つつ調査主体を客観化する視角は、新たな「よそ者」論を提出する。すなわち、民衆（村入りした「よそ者」を含む）、定住する「よそ者」と定住しない「よそ者」の三者が「文化空間」の中でダイナミックに交錯する姿が浮き彫りになる。

いふなれば、「生活」の論理へ肉薄するには、調査主体に実践性・当事者性を加味した視座が要請される。その視角から見ると、環境保全をめざす「運動」には、遊びという要素が不可欠であることも明らかになった。

キーワード：山村再生、環境保全、「よそ者」、「自由文化空間」

1. 問題の所在：生活への凝視と当事者性

生活破壊の極限は人間の身体破壊である。水俣病は、人間の尊厳の根本を根こぎにした。歴史的に人々の心の中で醸成されてきた「差別の構造」がその病の陰を深くし、病が新たな差別を創り出す⁽¹⁾。環境社会学は、こうした「身体的人間の破壊」（宗像巖の用語）に及ぶ生活破壊に対してはもちろん、新幹線公害、巨大開発・核燃料問題など、法的・政治的に激突する可能性の多い環境問題として生起する様々な課題に対して研究を蓄積してきた⁽²⁾。

一方、近年はこうした社会問題として生起し、運動へと発展する課題のみならず、「ありふれた空間・景観の保全」といった生活課題に対しても我々の研究が深化しつつある⁽³⁾。さらに、堀川三郎がいうように「建築物の保存」に加えて、その背後にある「生活」の保存をも考えていこうという「生活」への着目⁽⁴⁾、地球環境問題と地域環境問題が直結する現代において、こうした日本の環境社会学研究の深まりの背景には、実践を念頭に置いて「暮らしの論理」に肉薄しようとする研究者の語らない態度があるように思う。

しかし、嘉田由紀子は「経済援助とセットになった『ひもつき思想』」が海外援助に依存した途上国環境政策を支配しており、「声の小さい、というか本来言語化も困難で、声にならない、民衆の生活実践と日常の価値観と知識に視点を置く立場はほとんど見られない」と述べている（嘉田、1998:120）。

松村：山村再生と環境保全運動

嘉田の指摘を途上国の問題としてだけに留めておけない現実からの要請がある。現代日本の山村の「悲しさ」は、住民の諦観の奥底にある石牟礼道子という心の荒廃である。

「日本列島の改造……村を都市に変えてやるから有り難く思えというようなことで始まって、今やそれが貫徹していると思うんです。……役場も学校もコンクリートにしましたし、『もうどこに来てもらうても、もう田舎じゃあございません』とよく村長さんたちが胸を張っておっしゃいます。……人間の内部を、田舎の人間の一人一人に至るまで、その意識もやっぱりローラーでやったようにコンクリートのようものにしてしまったんじゃないかと思うんですね。……まず人間の内部がそのようにされて、その結果として、目に見える人間社会の崩壊になっているんだろうとおもいます」（石牟礼, 1998:35）。

この人々の「心の荒廃」を構造に起因するものとして客観主義的に突き放すことも可能であるが、南アフリカ「グウィの身体と言葉の世界」を「自閉症児」の我が子の世界に映してみようとする「身体的人类学」（菅原, 1993）、アフリカやサバルタンと日本の自分たちがく地続きであると認識する「生活の場的人类学」（小田, 1996a; 松田, 1996）のフィールドワーカーたちに倣って、「フィールドで定型化した文化の語りを聞き出した人類学者は、いかなる実践を編み出していくのか」（松田, 1998:216）と問いかけよう。

生活環境主義の視座を、山村の現状に照らしてその立場を徹底する方向はないだろうかと再度問うてみた。その時に、M. セルトーによって「ブリコラージュ的戦術」論を展開する小田亮や「構造的敗者」の「抵抗」に功利主義的な「動機」を見ようとする松田素二らの民衆像、実践観とも向き合う必要があるだろう⁽⁵⁾。

本稿は、「当事者性」を自らに課して環境問題にも「運動」にも無縁と思念された地域を敢えてフィールドとして、地域再生の手がかりと「よそ者」の実践のありようを探る試みである。

2. 「よそ者」と「自由文化空間」の創造

2.1. 「よそ者」論への疑問

嘉田は「民衆の生活実践と日常の価値観と知識に視点を置く立場」（嘉田, 1998）に研究者が容易に立てると言っているわけではない。地域住民の「身体化された歴史」であるハビトゥスに接近する方法を選択し、写真を提示して「生活の中に習慣化」したものを人々の記憶と身体のあるりようから拾い上げようとする（嘉田, 1997）。氏の「姿勢」は、自らの研究者としてのハビトゥスを自覚しないで取りうる姿勢ではない。「暮らしの論理」へ漸近線的に接近する方法として嘉田の「資料提示型インタビュー」は、生活環境主義や「よそ者」論に積極的な実践性・当事者性を付加する。

「環境社会学は、最終的な学問的な評価のレベルでは、何らかの形で価値中立的なスタンスをとる必要性が求められている」という鬼頭秀一の「よそ者」論は、アフリカに就く人類学者の身体を介在させたフィールドワークのプロセスや生活環境主義の理論的展開の積極性を否応なく剥ぎ取ってしまうのではないか。すなわち、「受難にあってみて初めて人間のことがよく分かった。……であれば、（苦しみを与えた人達を）許しましょう」と水俣病の患者に成り代わって説

く石牟礼の突き抜けた対象認識（石牟礼, 1998）、「構造的敗者」の創造的抵抗に自らを投入する覚悟を隠して硬質な筆遣いで書きつづる松田の「敗者」への哀感（松田, 1997）と鬼頭の乾いた「切斷」との懸隔を考える必要がある。

「哀感」などといってロマンティズムをことさら押しつけるつもりはない。「『異文化』と『自文化』を貫き人に不自由をもたらすシステムからの開放を意図し実践するゲリラとして、生活世界へと潜入していくこと」（松田, 1998:216）が人類学者としての責務であると松田は宣揚する。鬼頭の「よそ者」論に根源的に欠けているのは、松田のこの実践への意志と菅原が「ともにある身体」という時の、身体でわかるというわかり方への了解である。「ともにある」という用語は「あまり根拠のない理論的な偏向に陥ることなく、身体相互間の多様な関わりの幅を最大限覆いうる」（菅原, 1993:53）のであり、「身体にそなわった自明性をあてにしている」（菅原, 1993:55）フィールドワーカーの語らない信念から生まれたものである⁽⁶⁾。

「研究者は、その運動の当事者の思いやその地域の生活や文化という対象を『共感』を通じた手法で把握し、彼らの思いをその中で整合的な形で理解し、ことの真実に迫ることが必要である。それと同時に、環境運動をより普遍的な枠組みで分析し、意味づけをする役割が求められている」（鬼頭, 1998:155）と鬼頭は結論している。

氏のこの表現は、当事者性、実践への決意溢れた人類学者や生活環境主義の旗印に集う研究者たちの認識から読むと「定型化した語り」であり、平板に映らざるを得ない。非合理的「主体」への着目が「よそ者」自身の「非合理性」を内省させる契機となる（大杉, 1998:125）といった時に、「定型化した語り」を超えて「夥しい人間的努力による生活実践」（松田, 1998:215）へフィールドワーカーの凝視した目が向いていることを知る。さらに、鬼頭の表現からは生活環境主義の研究者らの仔細なモノグラフ（鳥越・嘉田編, 1984; 鳥越編, 1989）が語ろうとするところはスルリと抜け落ちてしまう。

この「よそ者」論と生活環境主義の立場を今一步深化させるために、筆者は何をすべきだろうかと考えてみたい。そうした時に、環境問題への関心から全く遠いある福島県の山村を念頭に置いて、実践を志向した「仮説」を提示してみたいと思う。もちろん、すでに触れた近年の人類学の成果や生活環境主義の研究者たちから学んだことがその背景にあることはいままでもないが、それ以上に山村の現場での試行錯誤に負うところが大きい。

2.2. 民衆の文化創造力

さて、マンデル夫妻はネオ・マルクス主義によって立つ「グラムシの追従者たち」の文化ヘゲモニー論をカリブ（トリニダード・トバゴ）のフィールドワークに基づいた「体験」から批判する。

労働者独自の文化活動を展開させることによって労働者階級は支配階級のヘゲモニックな文化的支配に対抗する可能性を強めている。つまり、文化活動は階級闘争の形を取るものだと見なされるのである。しかし、彼らは「草の根運動の発展（バスケットボール）は、支配的階級の文化的ヘゲモニーあるいは文化的統制への挑戦／抵抗を意味している」という理解を疑わしいものという（Mandle and Mandle, 1990:72）。

松村：山村再生と環境保全運動

「発展した資本主義国は西欧的なスポーツの形態と組織を押しつけることを通じて彼らの帝国主義的な支配の手を貧しい国々に伸ばしていく」という文化帝国主義的理解とこうした文化領域（スポーツなど）が支配階級への抵抗の機構になりうるというヘゲモニー論の双方を批判するのである。カリブの文化の中にこうした理解に同意する実証的な根拠を見いだし得ないとして、レイモンド・ウィリアムスに倣って、「バスケットボールは、『自由な open』文化であり、支配的模式／支配階級が『取るに足りないもの』として見過ごしてしまう領域である」と考える。

彼らの理解は、R. ウィリアムスの独自の読み替えである。R. ウィリアムスは、

「支配階級の独特かつ際だった特徴は、支配的模式への併合を目指すときに、実践と経験の全領域にその支配を深く浸透させるという点である。しかし、支配階級がすすんで無視したり、除外したりする領域がある。それは、取るに足りないということで、また審美的、かつまた当然のこととして一般化しようとするのである……。社会・文化のプロセス全体へこの支配階級が力づくで浸透することは今や決定的に大きくなってきている。……、新しい被支配階級 *alternative* は、支配階級の重要な領域を侵害する、つまり敵対したり、圧力をかけたり、時に彼らに寄り添ったりもする。しかし、この時点でもなお実践と意味の世界はある」（Williams, 1977:125-126）

という。さらに、「……より確かなものと思われる新たな被支配者階級の誕生よりも、それに先行する実践と差し迫っているが未だ熟していないもの」（Williams, 1977:127）に注目する必要があるというのである。彼はあくまで新しい階級の予兆を見るべきであると主張するのであるが、マンデル夫妻は「自由文化空間」の創造性を階級的なヘゲモニー論を超えたものと独自に理解するのである。いうならば、民衆の文化創造力を「定式化した語り」で切ってしまうことへの批判と理解すべきだろう。

「バスケット（の空間）は、どちらかといえば劣位にある人々の集団に、自己成就とアイデンティティの確認をする機会を増やし、自己表現と楽しみの機会をもたくさん与えている。しかし、それは彼らの貧しさを軽減することもないし、彼らの低い地位を変えるものでも、権力へ近づく可能性を増大させる訳でもない。しかし、彼らの日常生活を豊かにし、彼ら自身のコミュニティに影響を及ぼす決定を自らコントロールする可能性をもった領域を広げてくれるものである」（Mandle and Mandle, 1990:73）。

カリブ海に浮かぶ小国、トリニダード・トバゴの民衆バスケットボールの事例（Mandle and Mandle, 1988, 1994）と飽食日本の山村の環境保全運動とがいかにく地続きであるかを議論するには、さらに膨大な紙数を割いた論証が必要であろう。次節で取り上げる福島県南会津の過疎山村を松田に倣って「構造的敗者」と呼ぶことにためらいはある。また、「公益、市民公益活動、NPO、ボランティア」といったキーワードに表象される大都市圏の「市民活動」（高田, 1998）とは氏素性の異なる山村の「市民」活動に注目するとき、その双方間にある溝の深さに戸惑う。高田のいう「日本に『市民社会』をもたらし可能性」という強いベクトルをもった市民活動に対して、我々の山村に展開した「運動」は、あたかも迷走する温帯低気圧であり、いつでも消えゆく気配を漂わせている。

井上俊の「シニカルな理想主義」（井上, 1973:129）の主張が、対抗とも抵抗とも無縁の山村

の環境保全運動を意味づけるときに再浮上する。

「隔離された遊びの世界で、私たちは現実を離脱し、実生活の様々の重荷から解放され、ふだんは日常の埃に厚くおおわれてふれることのできない純粋な生にふれる体験をもつ。……そうした体験は、場合によっては、既存の『俗』なる秩序のあり方を批判する根拠となることもあるし、さらには『隔離』の限界そのものを超えようとする願望を生み出すこともある」（井上, 1973:121-122）。

「自分自身を含めて、『まじめ』になりすぎることや、正しくありすぎことを冷笑しながら、なおかつある種のやさしさをもって『善』を行いうる能力を人間というものは持っているのではないか。人間のそのような能力を、いろいろな形で、できるだけ開発してゆくことが必要だ」（井上, 1973:131）

と井上はいう。

氏の理想主義は強い「個人」を前提としたものである。それゆえ、山村の実践を具に見たりアリティから遠いとの批判も可能だろう。しかし、「自由文化空間」という概念も井上の主張する内包を伴って初めて生きてくるように思う。大震災でボランティアが活躍できた理由は「地縁コミュニティの崩壊」であったという。「これまでの地域づくりでは、どちらかといえば地域への愛着など義務的なものが強調され、自発性を魂とするボランティアの関わる余地は少なかった」（高田, 1998:110; 佐野, 1996:16）ともいわれる。

山村の「運動」では、地縁コミュニティのしがらみを幾重にもまとった人々が登場する。ムラに片足を残したままで、いつでも「運動」からは撤退する用意がある。つまり、彼らは「狡知」に満ちて権力へ敢然と「抵抗」する勇者でもない。さらに、「遊び」をおずおずと提案する「よそ者」も登場する。この「よそ者」には、運動に「遊び」のラディカリズムが不可欠であると言いつ切る自信もなく、井上や先の菅原らの透徹した視線の強さはない。どちらかといえば、研究対象としての生活者に寄りかかりつつ、自らをその「空間」の中に縛り付けて方向性を模索するという非積極的な姿勢が見て取れる。この「よそ者」の人間像は、社会運動を担う理念型の人々のそれとはあまりにも遠いといえよう。

3. 福島県南会津地方の環境保全運動：山村 NPO と地域再編計画

3.1. 南会津グリーンツーリズム国際大会の開催

以下の事例については、すでに『山村の開発と環境保全』（松村, 1997）の中でその一部が報告されている。多少の重複があるかもしれないが、以下ではそれまでほとんど可能性が見えてこなかった日常的な生活圏を超えた山村NPOの近年の動きを追って、住民運動、市民運動のトレースとは異なった「運動」のありようを概観してみたい。前著では、T町大字H在住のA・B両氏と首都圏の大学助教授K氏の三人を中心として南会津の「生活課題を優先した環境保全の運動」の出發が報告されている（松村, 1997:343-350）。以下では彼らが中心となって展開してきている「南会津グリーンストッククラブ（以下GSCと略）」の理念と実践について述べてみよう。

1996年1月の発会式で、GSC会長Y氏は「……つまり働けば働くほど収入が減っていくという現実が、林業にもあるわけです。南会津地方の農山村は、農業も先行き暗く、林業もということ

松村：山村再生と環境保全運動

で、暗いことだらけという実態」であり、行政は企業誘致と（大規模）観光開発で町の活性化を！ と考えている。しかし、これには懐疑的であると行政関係者がいる前できっぱりと述べた。Y氏は、地元で中学校の校長を退職し、A氏らに乞われて会長職に就いた。人口減少、過疎化が進んだにせよ、「より生き甲斐のある地域にするための政策提言、実践活動をしていくことが会の狙い」であると述べている（南会津GSC:1）。

さらに、同会長は1997年10月に開催された『南会津グリーンツーリズム国際大会』によせたクラブ宣言「緑との共生」で自らの理念を表明した。

「誇らしげな緑の木々と精澄な水、そしてそこに住む勤勉で表情豊かな人々が今日も緑を相手に土を掘り返す。無垢な子供たちが野良で兎と戯れ、無心に鳴き続ける蟬にそっと近づく。小川では小さな背びれをなびかせる魚を水飛沫の濡れなど気にしようともせず追い続ける親子。福音者らしきテクノロジーが演出する都市社会の中で、心のさしみや蝕まれた体の回復を求めて人々が起伏のある草原や広葉樹林の中に体を横たえる。そしてまた、あるものは慣れないながらも鎌を研ぎ、鋤を振るい、土と対話し、収穫を喜ぶ。そしてある者は、山道を駆け、畦道を歩き、そして自転車を漕ぐ。笑顔が行き交い、歓声がこだまする。もし、南会津に新しい文化の流れをつくらうとするなら、このような映像を再び現実化することだと思う。「開発に遅れた」というイメージは南会津にはふさわしくない。もしかすると緑には開発という言葉は不似合いなのかもしれない」（『南会津 トレイン&バイクマップ』1997年10月）。

氏の文章には理想主義とロマン主義が混在する。前の発言は地元を離れての第1回の旗揚げ式でのものであるがゆえに、時折強い調子を含んで「行政」への信頼感の欠如を指摘した。南会津地域の参加者16名、大学研究者、コンサルタント、企業から9名、K氏の指導院生等8名（合計33名）が首都圏にあるK氏の大学に参集した。地元自治体の企画観光課も一応は名前を連ねてはいるが、実際に参加したのは4市町村のうち1村のみであった。しかし、地元16名のうち、役場職員の肩書きを持ちながら個人としてこの旗揚げ式に参加した人は5名（内1名は林業公社に勤務）に上った。

こうした状況の中での会長の行政不信表明であった。K氏が13年前に初めてT町役場を訪ねた時に、若い役場職員がものを言いにくい雰囲気があり、課長クラスの人々の考えが強く出ていることが肌で感じられたという。特に、このT町は幕藩制期に幕府直轄地であったことも手伝って、様々な役所の出先機関が集中し、合同庁舎があるのも南会津ではT町のみである。飲み屋の数を数えれば、このT町が突出していることが一目でわかる。翻って言うと、南会津郡の他町村に較べてT町はこれまで「安定」しており、動きとしては少ない町とすることができる。その動きのなさは、必然的に「事なかれ主義」を産み出し、役人気質がT町の若者の動きを停滞させてきたとK氏は語る。

さて、この会でK氏は「研究会」発足に至る経緯を個人的な思いをも含んで長く語り、自ら地域に係留して実践を進めていく覚悟を述べた。

「記号とか情報とか何か根なし草的なものに、私たちが左右されて生きなければならない社会を創り上げたことは、事実として受け止めなければならないと思います。そういう中で、私たちは南会津という空間だけではなくて、その中で生きる人々の『身体』というものも、引き受けなければならないと思い

ます」(南会津GSC, 1996:5)。

この生硬な語り口は南会津郡全域の生活者の心情とは全く隔絶している、というよりなんらその代弁となっていないことをK氏は知っているのだろうか。別言すれば、このような表現が身についてしまっているのではないだろうか? 筆者はかつてK氏を「自らは地元の人々に近いと思ひこんでいる節」(松村, 1997:346)があるとその無自覚な姿勢を評したことがある。そのことは、次の「T村人材育成21人会」の会長H氏が1997年10月に下郷町で開かれたGSC主催の国際会議第2分科会での発言と比較するとK氏の「よそ者」としての目の高さがよくわかる。

「……自然保護、環境保全とは言わないまでも、道路愛護とか河川愛護、花いっぱい運動、関普請、堀さらいなど。これら親しみやすい愛称で自分の周りの環境美化に努めて、自分で気づかぬうちに自然に目を向けているのが南会津の人だと思います。また、そういった活動の中心に位置しているのは、女性です」(GSC, 1998:173)。

彼はさらりと言ったのけた。こうしてみるとK氏という「よそ者」がこの地域で果たす役割とは何だろうと再度考える必要がある。K氏は、確かにGSCの仲間を自分の理念に合わせて引っ張っていかうとはしていない。彼のその柔らかさが、地元の人々のある種の信頼感を引き出しているのだろう。しかし、彼が「地域に自らを係留して」というほど、地元の人々と交流しているわけでもなく、筆者から見ると「距離」を取っているようにみえる。「よそ者」であろうと努めているようでもあり、「身体」そのものがそうさせているようでもある。対して、H氏の視線は、確かに彼らの日常生活の高さに定位している。

海外招待者8名、国内招待者15名、参加者が300名を超える国際会議を南会津の若者たちはやり終え、そして大会が「成功」だったと評した⁽⁷⁾。しかし、GSCのメンバーのみならず、既存の地域青年組織を動員しての「成功」であった。つまり、T町商工会議所青年部、青年連絡協議会のメンバーが10数人当日の駐車場係などに張りつけられていた。その一人がK氏に「先生、俺未だにグリーンツーリズムって何だべか、わっからねえな」と笑顔で囁いているのを傍らで聞いた。K氏の表情をその時のぞき込んだが、笑顔と共に駐車場整備の苦労をねぎらう言葉だけが発せられた。日頃から顔見知りであることを除いて、事情を知らない人が聞けばK氏への痛烈な皮肉とも聞こえる。その要素もたぶんにあったかもしれないが、「俺も手伝ってるからな」とK氏に言いたげな表情であった。ボランティアと動員が複雑に交錯する大会運営である。

総経費が1000万円近くに上った大々的な「国際会議」を過疎の山間地で開き、240頁に上る英文を交えた報告書が啓上された。海外招待者の基調報告が南会津の人々の関心を引いたとは筆者にはとても思えない。しかしながら、2日目の分科会での地元の人々の発言は、先の「21人会」の会長H氏に代表される「地に足のついた」立派なものであった。

K氏の狙いは、「国際大会」と銘打ちながら大会第2日目の地元リーダーたちが彼らの生活課題を語る分科会にあったのだろう。「グリーン・ツーリズム」の名称も農政、県政の風向きを察してのことであるし、地元の人々の心の奥にあるコンプレックスを払拭するための「国際的」と銘打った「仕掛け」であったことがわかる。また、この大仕掛けでなければ、公に補助をもらう

松村：山村再生と環境保全運動

こともできなかったであろう。K氏と地方振興局長I氏の戦術が「成功」したということになる。

GSCが「自由文化空間」かどうかを計り、評価する必要があるだろうか。井上が主張する遊びのラディカリズムとも、彼らの「運動」は遠い関係にあるように思う。

脇田健一は、ゴルフ場反対運動の一翼を担った一人のリーダーを追うことで、「普遍的な知見の獲得」を目指そうとせずに、運動の「スタイル」として捉えることで「単なる理念型的説明を超えた」人々のダイナミズムを把握しようとした（脇田, 1996）。

「人々は、自分たちの生活を守るために、そして、大きな力と対抗するために、相互に関係を持ちながら何が社会問題なのかを定義し、それを公に向かって主張するとともに、戦略的に対抗手段を立てていく」（脇田, 1996:184）のが住民運動や市民運動であるならば、こうした明確な戦略や対抗手段を起てられなかったGSCの「運動」が果たしてどんな運動といえるのだろうか。

3.2. トレーン&バイク

旗揚げから国際会議開催の1年10ヵ月は、ただただこの会議の準備にGSCは奔走したと言ってよい。その間に「トレーン&バイク」という地元の赤字鉄道に自転車を持ち込むイベントを3回ほど試験的に行った。その過程で、自転車を駆って林道を走り回り、温泉に浸かって電車で出発点に戻るといった何気ない「遊び」が、意外に地元の中年メンバーを筆頭に好評であった。この「遊び」と環境保全との繋がりを参加者が意識していたかということ、K氏すらも心許ない。

しかし、この赤字鉄道の運輸部課長S氏の入れ込みようは尋常ではなかった。もちろん、運輸実績を上げることが彼の仕事であることに違いないが、毎回20名弱の参加に留まるこのイベントに10回連続、すべてに参加した。「ちょっと電車を取ってきます」といってまるで車を廻してくるかのように自分で特別車両を定時の列車に接続する。彼は仕事とも遊びともつかずに「特別車内放送」までやってしまうのである。

K氏の発案は、米国の「レール・ツー・トレール」や「グリーン・ウェイズ」の運動を真似たわけでも、それが環境保全運動と連動する確たる動きになるという保証も皆無で、悪くいえば場当たり的なものにすぎなかった。しかし、10年間この地域に通ううち、通勤時を除いて1両に2、3名の乗車ではしるこの鉄道が環境保全運動への「鍵」とであると直感していたという。地元の新聞に売り込み、記事を掲載することはもちろん、全国紙が大きく取り上げて（朝日新聞1998年9月1日東京版夕刊、Asahi Evening News Nov. 3, 1998）、クラブ員の閉塞感を癒していた⁽⁸⁾。

山村の空は広がり欠け、それがそこに住む人々の閉塞感をなにかしら産み出していたということは強ち誤りではない。福島県の中通りからこの南会津に入るには3本のトンネルを抜けなくてはならない。奥会津へはさらに1本長いトンネルを抜ける必要がある。これらのトンネルが開通したのは12-15年前、以前は日光街道今市市から北上する道路が使われていた。この閉塞感が首都圏の大学に勤めるK氏を受け入れようとするのではないだろうか⁽⁹⁾。「都市につながる安堵」という意味である。

国際会議の後にこの「トレーン&バイク」イベント以外に主だった活動は見られず、K氏が期待し続けていた学習活動も始まる兆しは見えなかった。それどころか、1998年春の総会で決めた会費（6,000円／年）の徴収すらされずに年度を終わろうとしていた。国際大会後に全国紙A新聞

を退社したO氏夫妻がT町大字HのC地区に定住し、この会の事務局を自ら進んで担当することに決まった。K氏とは異なる定住する「よそ者」である。

O氏夫妻とK氏の提案で2ヵ年の会費を一度に徴収することとなったが、この強引な会費徴収にたいし予想した倍の会員が即座に納入を済ませ、「おつき合い」会員が抜けた「すっきりした」形のクラブとなった。38名のクラブ員の内訳は、地元3ヵ町村在住者28名、東京在住南会津出身者1名、K氏大学関係者6名、近隣市町村3名である。ここに農林業を主とする会員は皆無である。つまり、役場・公社を中心とした公務員が主体であり、それに大学関係者とマスコミ定年後の定住者が加わっている。

GSCは、99年度の活動計画として、(1)「トレイン&バイク」イベント、(2)山村大学、(3)K湿原の保護をあげ、従来の活動から大きく拡大して実践に移してきている。

(2)は、「山村振興のための野外教育と人材育成事業」⁽¹⁰⁾として地域振興サポート事業として福島県の補助事業に採択され、3年計画で行われる。主催はGSCであり、首都圏の国立大学の教員たち6名はその支援要員という体制で行われる。地元講師を起用して南会津住民、学生・院生を交えた野外教育、自然教育の「場」が設営される。99年5月すでに「カヌーからみえる自然の美」の実習が試験的に実施され、地元、学生双方の好評を得た。

(3)のテーマは、これまでこのグループの中で10年後、20年後の目標として語られてきたことであるが、昭和45年に「国指定天然記念物」として指定された「K湿原」(約105ha)の保護活動に乗り出そうというものである。T町が「保護用地測量費」を予算計上したことに勢いを得て、政策提言を目指す活動計画である。この課題は、湿原に隣接した開拓用地の買収などの問題が絡んでいて大変大きな問題を抱えている。

「トレイン&バイク」イベント以外、GSCの活動に見るべきものがないと述べた。しかし、これは公平を欠いた表現であったことがわかるだろう。このGSCは、3ヵ町村にまたがる住民の個人的なネットワークで成り立っているのである。しかし、メンバー個々人は生活地域に戻れば生活者としての社会関係の中にある個人でもある。それゆえ、地域や職場の様々な関係を介在させて、GSCの活動と連携した環境保全や地域づくりの実践を行っている有力メンバーもいる。

その一人は、勤めていた役場を定年前に退職し、町並み(S町O地区)を保存するための活動(茅葺きの技術習得)に飛び込んでいる。さらに、A氏とともにGSCの主要メンバーであるYY氏は、実に三つの地域づくり、福祉活動のボランティアの中心人物となっている。環境保全の活動に直接連動するという実践ばかりではないが、地域づくりに貢献する活動をGSCに学んでボランティア集団を立ち上げてきている。こうした「運動」の拠点づくりが生活圈(町、集落)の中で始まっている。視線を生活レベルに近い地点に落とすことで見えてくる地域再生活動である。

3.3. 大字Hの騒動

かつて「どんづまり」と称したC地区を含めて11区(小字)からなる大字Hは、今、騒動の中にある(松村, 1997:343-350)。農林業が壊滅状態であることは、今さらいいうまでもない(表1)。しかし、海拔700mから750mにかけてのこのH地区で、依然として高齢者による自給的農業が維持されている。耕作放棄率は、1.2%(1985年)から5.5%(1990年)に急増した後、そのま

松村：山村再生と環境保全運動

表1 耕地状況と農家数

農家数：戸
面積：a

地区	年度	経営耕地総面積	農家数	田	畑	樹園地	借入耕地	貸入耕地	耕作放棄地
				面積/農家数	面積/農家数	面積/農家数	面積/農家数	面積/農家数	面積/農家数
T町	1980	145515	1614	92399/1419	35917/1586	17199/268	21050/538	14368/410	6044/251
	1990	113258	1358	81713/987	22178/947	9367/116	-	-	11384/356
	1995	99372	919	75220/891	1899/843	5160/73	-	-	14129/366
H地区	1980	10111	130	8814/130	1129/128	186/6	985/38	281/16	100/4
	1990	8884	119	8141/118	743/92	-	1587/44	537/21	457/24
	1995	8131	109	7332/108	774/97	25/2	1687/33	349/16	630/31

出典：農業センサスより作成

表2 H地区新住民調査

1998年8月現在

年度	総計		Uター		Iター		Jター		半定住		定住
	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数
S60	1										1
S61	3	12	1	4	1	4	1	4			
S62	2										2
H1	4	1	1	1							3
H2	2	4			1	4					1
H3											
H4	5	11	1	1	2	8			1	2	1
H5	2	3			1	3					1
H6	3	3			1	3					2
H7	3	10			1	6			2	4	
H8	4	4			2	4					2
H9	6	8			1	2	1	4	1	2	3
H10	4	8			3	6			1	2	
総計	40	64	3	6	13	40	2	8	5	10	17

聴きとり調査による（芳賀沼聖氏協力）

表3 H地区の年齢別人口分布

年度	地区	総計	0-14歳(%)	15-29歳(%)	15-64歳(%)	65歳以上(%)
1990	H地区	652	109(16.7)	83(12.7)	388(59.5)	155(23.8)
1998		709	108(15.2)	91(12.8)	406(57.3)	195(27.5)
1990	T町	14,425	2,744(19.0)	2,111(14.6)	8,950(62.0)	2,731(19.9)
1995		14,216	2,493(17.5)	2,058(14.4)	8,567(60.2)	3,158(22.2)

まで維持されている（5.9%, 1995年）。同程度の規模の大字集落でT町の平場農村であるN地区では、3.4%（1985年）、12.1%（1990年）、14.7%（1995年）と拡大傾向にある点と比較すると大字Hの耕地の荒廃は留まったといえる。その理由が大字Hの新住民の増加にある。

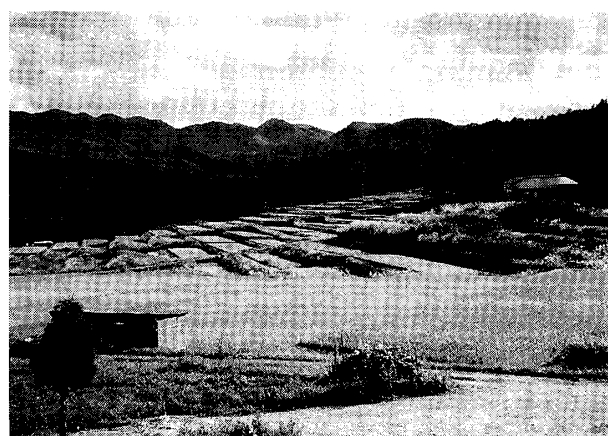
「新住民調査」（表2）で見るように、1986年「ウッド村地区」に入ったP-16を皮切りに「スキー場地区」「C地区」へと移住者、別荘建設者が1992年以後急激に増えていった。いうなれば、バブル経済崩壊後にこの地を選んで入った人々である。C地区は、この3年間のうちに8軒が完成、現在1軒が新築中、計画決定が1軒と地付き7軒に加えて12軒が揃うことになった。このよ

表4 来住者一覧

地 区	世代番号 ・形態	現・前 住所	年代	(元) 職 業
大 字 ス キ ー 場 地 区	1-LL			
	2-LL			
	3-LL			
	1-P-◆⑦	福島県	▲	地域内スキー場勤務
	2-P-◆④	福島県	▲	地域内スキー場勤務
	3-P-◆①	東京都	○	元サラリーマン
	4-P-◆②	東京都	△	国際通信サービス ※
	5-P-◆②	東京都	△	元美術専門学校講師
	6-○	東京都	▲	元製造業
	7-◇	東京都	▲	元全国紙A新聞社
	8-◇	田島町	○	H製作所社員
	9	東京都	▲	元放送局人事部
	10-◇	東京都	△	自営業
	11-◇	東京都	●	消費組合連合 ※
	12-◆②	横浜市	●	石油会社 ※
	13	茨城県	●	国際通信サービス ※
大 字 ウ ッ ド 村 地 区	14-◆①	神奈川県	△	銀行
	15-◆④	東京都	△	Jターン
	4-LL			
	5-LL			
	16-P-◆④	福島県	△	元サラリーマン
	17	茨城県	●	公務員 ※
	18	埼玉県	△	自動車整備業
	19	福岡県	△	教師
	20	栃木県	△	公務員
	21	東京都	△	音楽プロデューサー
	22-◇	東京都	△	フリーカメラマン
	23	埼玉県	△	自営業
	24	埼玉県	●	自営業
	25-◆③	埼玉県	△	H製作所社員
	26-◆④	東京都	○	H製作所社員
大 字 H C 地 区	27-◆④	群馬県	▲	H製作所社員
	28-◆②	東京都	▲	元教師
	29-◆②	栃木県	▲	元教師
	30	東京都	○	教師
	31	東京都	○	整体師
	6-LL			
	7-LL			
	8-LL			
	9-LL			
	32-◇	東京都	○	サラリーマン
	33-◇	埼玉県	△	キノコ関係研究職
	34	茨城県	△	首都圏国立大学教員
	35	埼玉県	▲	印刷業
	36	神奈川県	▲	元公務員
	37	埼玉県	○	印刷業
	38	茨城県	●	首都圏国立大学教員
	39-◆③	神奈川県	▲	元全国紙A新聞社
	40-◆②	東京都	●	イラストレーター
	41-◇	神奈川県	●	全国紙A新聞社
	42	水戸市	●	歯科医者
	43-◆②	埼玉県	△	地方局フリーアナウンサー

LL :地主
 P :ペンション
 ◇ :半定住
 ◆ :定住
 ◎ :寮
 ① :家族数
 ○ :30歳代
 △ :40歳代
 ● :50歳代
 ▲ :60歳代
 ※ :近い内に職を辞める
 予定者

写真 C地区の棚田風景



うな移住者の増加は、大字Hにある分校（小学校）の生徒数を増加に転じさせて、T町の市街地地区の人々を大いに驚かせた。

K氏が友人と共に建てた小屋（1989年）はこのC地区にあるが、4年後に2軒となった後は動きがなかった。しかし、この3年間は地区の人々が「どうなるものやら」というほどの建築ラッシュとなった。山林の中に密集建築した「ウッド村地区」での境界をめぐる問題発生に対する反省もあって、この地区ではログハウスの建築用地300坪、それに農地300坪をつけての借地契約が基本であり、年間借地料は15万円（うち畑分5万円）である。この借地方式が効を奏したといえる。

写真のような棚田に所々見られていた耕作放棄地が、この2年間でどんどん減ってきている。それは、この地区に入った人ばかりでなく大字Hへの新来住者（＝定住する「よそ者」）が地元の高齢者を助けてこの棚田の耕作を再開したことが理由である。

松村：山村再生と環境保全運動

C地区では一昨年、昨年と他出していた後継者二人が結婚を期にUターンした。それに加えて増改築が隣接する地区を合わせると6軒となる。この変化は留まることなく、大字Hの中心にある簡易郵便局が今年ログハウス風に新築された。この郵便局を経営するM氏はGSCのメンバーの一人であり、大字Hに製材工場を持つA氏・B氏の勧めに従って大字H再生計画を実践に移したのである。さらに、定住する「よそ者」（表2, 28, 29, 5-P）が地主であるM氏を助け、村落民のための大型ベンチを完成させた。

ここまで述べてくれば、もはや明らかであろうが、こうした増改築ブームの背景には、これまで「無価値」と思われていた荒れた杉林の活用による借地料、農地付き別荘の借地料が入ったことがある。M氏は借地により今年度より年間100万円の収入を得ることになった。それに留まらず、住居地・農地の貸借関係を越えた大字Hのむらづくりの新たな協力関係を作り上げてきた。さらに、9名の「地主」が誕生し、大字Hの「地主会」なるものもできている。

さて、この7年間で27軒（大字H）、C地区では3年間で10軒のログハウスが軒並み建ったわけであるから、その景観も大きく変わってしまった。10年前のK氏とA氏・B氏との計画では、「隣の建物が見えないこと。森の中にすっぽりと入った感じ」が条件であったが、広葉樹の植樹などのB氏の努力にもかかわらず、さながら「別荘開発地」の感が出てきてしまった。ログハウスで統一されることを期待したA氏・B氏の思惑も少しずつずれて、彼らとは異なる業者が工場生産のサイディングボードを使った小屋などを建築するに至った。C地区（38）のF氏（97年小屋建設）は、「純朴な山里の景色と田舎暮らしに憧れて行ったつもりですが、短期間の内に無秩序とも思える土木・建設工事がどんどん進んで、半ばあきれながらがっかりしています。……あの地区が一体どうになってしまうのか、何かできることはないのか思案しています」とK氏への私信に述べている。

4. 結びにかえて：生活地域・定住する「よそ者」・象徴力を行使する「よそ者」

前節で述べたGSCの活動が南会津の環境保全運動の象徴的な部分を担っていることが、大字Hに視座を据えると知ることができる。GSCの有力な会員は、いずれもが生活地域において独自の地域再生運動を担っている。大字Hの近年の動きを創り出しているのは、同じGSCのメンバーであるA氏とK氏、それにB氏である。しかし、彼らが創り出す現実の大字Hの変貌とGSCの「自由文化空間」はさながら異空間である。定住しない「よそ者」のアイディアはGSCの「自由文化空間」でこそ活かしているが、大字Hではそうした「文化空間」を創設することすら未だ可能ではない。つまり、A氏の言葉から推察すると「実績がない」と言葉もアイディアも霧散してしまうのである。

実績とは、枝葉を取れば「金」である。見捨てられた山林が1反歩10万円で貸せる。これ以上の実績と数字は想像できない。実績を現実化するのは、大字HではA氏とB氏である。K氏は、彼らの後ろで佇んでいるだけである。二人の背後にK氏がいて様々なアイディアを出して協力関係を強めているという誤った認識がある。K氏はC地区の沢水を集めた簡易水道を守ることがひいてはK湿原の保護、持続的な「開発」の主体としてこの地区が独自のアイデンティティを創り上

げると考えていたが、B氏のユンボーはいとも簡単にパイプを掘り起こし、町の水道に切り替えてしまった。また、棚田の真ん中を不似合いな農道が造られ、無機質の白いガードレールが連なってしまった。この意志決定に定住しない「よそ者」が参画できるはずもない。

この定住しない「よそ者」の象徴力は、生活地域を超えたところでよく機能し、定住する「よそ者」を引き寄せることに大いに貢献した。生活地域においても確かに彼の象徴力は機能するのであるが、地元A氏・B氏の実績提示力に依存したものであることがわかる。

風景を改変し、「実績」すなわち何らかの「実入り」となってはじめて地元は動く。大字Hの有志で、K湿原の下にある売店の営業を共同で始めようという気運がでて、来年から実施することに決まったことは、A氏とK氏が「職場を創り出す運動」と言い続けてきたことの「実績」となりつつある。定住する「よそ者」であるO氏⁽¹¹⁾は、これは大字H全体でやるべきだという。つまり、個人に権利を分割して経営をするのではなく、あくまで大字Hの合議で売店経営をすべきであるとの主張である。この定住する「よそ者」の主張は、大字Hの「意志」と符合する。その理由は、菅原のいう「ともにある身体」という表現が馴染まなければ、O氏の長年にわたる「村おこし」の現場歩きで培った勘がそういわせるのであろう。

いわゆる「組」であるが、わずか8戸といえども従来から独立した講組織をもつC地区でも、自らのお膝元の変貌を目の当たりにしてC地区独自の対応をすべく話し合いを始めている。埋もれていた地域アイデンティティが顕在化してきた。

生活地域と創られた文化地域（GSCのメンバーの居住するエリア）というレベルの異なる2地域での「運動」が同時に進行していなければ、K氏という定住しない「よそ者」が象徴的機能を果たすことはなかったと思う。さらに、K氏の「地域に自らを係留して」、「身体に備わった自明性をあてにして」地元の人々と「文化空間」に参画する姿勢が、「よそ者」としての作法であろう。定住する「よそ者」の時間的な経過とともに、生活地域での「文化空間」へ地元の人々がどう関わっていくかも今後注目すべき課題である。

さらに、K氏は自らの活動の舞台を大字Hに据え、野外教育という「装置」を持ち出した。この「装置」を使って歴史的な基盤をもつ生活地域に「文化空間」を創り出そうとしている。その「文化空間」に地元の人々と定住する「よそ者」が交錯する実践の場を創り上げようという戦略の現実化である。この「装置」が決してマンデル夫妻の「自由文化空間」といえるものではないことはもはや明らかであろう。野外教育を中核とする「文化空間」は、外の世界と深く繋がらざるを得ない。「生きる力」を強調する中央の文教政策、グリーンツーリズムを推進する県の政策方針などと無縁ではあり得ない。その「空間」の自律性を守るのが「よそ者」の役割（ゲートキーパー）である⁽¹²⁾。この「野外教育」という「遊び」に対しての期待は、地元住民と「よそ者」、さらに定住する「よそ者」では、同床異夢の恐れがあることは容易に推測できよう。

注

- (1) 「じごろ（地五郎）」と「ながれ（流れ）」の差別構造が水俣病初発の時期の「自律の差別」として人々を内から縛った（鶴見, 1983）。未認定患者への差別のありようは、「『認定』が水俣病患者を生み出すという逆転がおこる」という言葉に集約される（関, 1999）。

松村：山村再生と環境保全運動

- (2) 近年のまとまった大きな仕事として飯島・長谷川・船橋（1997）。研究成果の概略は、飯島（1998）に詳しい。
- (3) 堀川三郎、吉兼秀夫、野田浩資の歴史的環境保存に関わる業績がその典型である。
- (4) 生活環境主義に立つ諸研究、我々のライフスタイルそのものが問題発生とその解決への戦略点であるとする実践への理論武装（鳥越皓之）も言うまでもなく「生活」の視座に裏打ちされている。
- (5) 「研究対象の中へ入り込み、その中で対象独自が持つ『構造的意味』を探りだそうとする、そのために（調査対象と研究者との）『距離』を縮めようと努力し、分析道具を捨てることも厭わない有賀。対して、同様な心的態度を持ちつつもあくまでその『距離』を保つことで対象をよく捉えることができる」と考える鈴木」（松村, 1998:128-129）。この日本農村社会学の先達である有賀喜左衛門と鈴木榮太郎の二人に、当事者性という意味で違いをみることはできない。視線の強さという意味で二人は決別する。
- 小田・松田と筆者の実践観の違いを取って表現すれば、アフリカと日本というフィールドの違いに由来する当事者性の差、つまり、「地域」に自らを係留して実践を編み出す方法以外に取り得ない日本の山村であるがゆえの差というべきかもしれない。研究対象への「入り込み」という点で、大杉高司の「非合理的」な主体論の整理にも多くを学んだ。
- (6) 筆者が「『身体』のフィールドワーク」と呼んだものである（松村, 1995）。それが可能となる「場」を設定する必要がある。この「場」という発想は、P. ブルデューのように戦略や資本が効率的に発揮される「場」とは異なる。
- (7) 大会3日前、「この大会は誰のためのものか？」という批判がA氏を通じてK氏まで届いた。大会のプロシーディングスの翻訳整理で氏は3日間ほど徹夜に近い日々を送っていたのであるが、片道4時間弱の現地へすぐ飛んだ。GSC内の人脈のねじれも手伝っていたようであるが、K氏が「我々の側にいるのか」という首実検的な要素が強かった事件である。海外招待者の基調講演は確かに彼らには全く馴染みのないものばかりが並んでいるという印象は否めない。
- 1 バーナード・レーン（英国・ブリストル大学生涯教育学科準教授）「『グリーンツーリズム』その概念、実際、そして最良の実践」
 - 2 小山善彦（英国・バーミンガム大学日本研究センター副所長）「ヨーロッパにおける農村ツーリズムの戦略と方法論—マネジメント、パートナーシップそしてネットワーク」
 - 3 ハル・ヒエムストラ（米国・レールトレール保全協会国家政策部次長）「『レール・トレール運動』による地域活性化」
 - 4 ボブ・ボーズ（カナダ・前サーレー市長、元ブリティッシュ・コロンビア大教授）「ブリティッシュ・コロンビアにおけるサイクリングとクロスカントリースキー」
 - 5 ダグ・レオナルドセン（ノルウェー・リレハンメル大助教授）「第17回冬季オリンピック—環境に優しいオリンピックだったのか、それとも表面的な変化だったのか？」
 - 6 ヘニング・アイヒベルグ（デンマーク・民衆大学教授）「ランドスケープの展開—そのシナリオと草の根の対立：デンマークの農村地域における緑の復興」
- (8) 『Be-Pal』『Goody』といったアウトドア専門誌は、この活動を大きく取り上げていたが、会員の関心は全国紙の取り上げ方にも集中していた。
- (9) かつて「中野—似田貝論争」（東大出版会『UP』誌上）で、東京文理大の前史をもつ教育大学の教員（中野卓）であるがゆえの処遇を受ける旨の発言があったことが思い起こされる。大学の持つ象徴力は、かつてとは較べようもないが考慮すべき点である。
- (10) 正式名称は「山村振興のための野外教育と人材育成事業—NPO・自治体・大学間のパートナーシップ」である。事業内容の概要は、(1) 自転車を使った自然教育（2回）(2) カヌーからみえる自然の美（2回）(3) 冒険キャンプ（1回）(4) キャンプとカウンセリング、加えて講演会・講習会として、(1) 山村振

興と野外教育の可能性 (2) 自然美をダンスパフォーマンスで表現する (3) 明るい山村生活とは何か？

以上が99年度に実施される。

(11) 地域活性化の事例をA紙に署名入りの記事を載せ、田舎暮らしの著書も持つ。記者として地方を歩き回って退職後夫婦共々移住した。

(12) 鬼頭 (1998:51) は、「よそ者」による普遍的な視点の導入によって、地域の環境意識が変容していくと述べている。氏の方法はあくまで方法論的客観主義を貫くものであるが、筆者は、フィールドの内にあるという感覚を残して「普遍性」に向かう道を探す手法を考えている。

文献

- 堀川三郎, 1998, 「歴史的環境保存と地域再生—町並み保存における『場所性』の争点化」 船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12 環境』東京大学出版会.
- 飯島伸子, 1998, 「環境問題の歴史と環境社会学」『講座社会学12 環境』東京大学出版会.
- 飯島伸子・長谷川公一・船橋晴俊編著, 1997, 『巨大地域開発の構想と帰結』東京大学出版会.
- 井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』筑摩書房.
- 井上俊, 1977, 『遊びの社会学』世界思想社.
- 石牟礼道子, 1998, 「波と樹の語ること」『現代思想』26-6:30-39.
- 嘉田由紀子, 1997, 「生活実践からつむぎ出される重層的所有観—余呉湖周辺の共有資源の利用と所有」『環境社会学研究』3:72-85.
- 嘉田由紀子, 1998, 「所有論からみた環境保全—資源および途上国開発問題への現代的意味」『環境社会学研究』4:107-124.
- 鬼頭秀一, 1998, 「環境運動／環境理念研究における『よそ者』論の射程—諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4:44-59.
- Mandle, Jay R. and Joan D. Mandle, 1990, "Open Cultural Space: Grassroots Basketball in the English-Speaking Caribbean," *Arena Review*, 14-1:68-74.
- Mandle, Jay R. and Joan D. Mandle, 1988, *Grass Roots Commitment: Basketball and Society in Trinidad and Tobago*, Caribbean Books.
- Mandle, Jay R. and Joan D. Mandle, 1994, *Caribbean Hoops: The Development of West Indian Basketball*, Gordon and Breach.
- 松田素二, 1996, 『都市を飼い慣らす—アフリカの都市人類学』河出書房新社.
- 松田素二, 1997, 「植民地文化における主体性と暴力」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化』新曜社: 276-306.
- 松田素二, 1998, 「文化・歴史・ナラティブ—ネグリチュードの彼方の人類学」『現代思想』26-7:206-219.
- 松村和則, 1995, 「有機農業の論理と実践—『身体』のフィールドワークへの希求」『社会学評論』45-4 (180): 39-53.
- 松村和則, 1998, 「書評 山本努『現代過疎問題の研究』」『社会学評論』49-3:128-130.
- 松村和則編, 1997, 『山村の開発と環境保全—レジャー・スポーツ化する中山間地の課題』南窓社.
- 南会津GSC, 1996, 『南会津グリーンストック』1.
- 南会津GSC, 1998, 『持続可能な地域とツーリズムを求めて—Contributions to The International Conference for Green Tourism in S. Aizu Japan』.
- 小田亮, 1996a, 「ポストモダン人類学の代価」『国立民族学博物館研究報告』21-4:807-875.
- 小田亮, 1996b, 「しなやかな野生の知」青木保他編『思想化される周辺世界』岩波書店:97-128.

松村：山村再生と環境保全運動

- 大杉高司, 1998, 「『主体』への回帰は成功するか—カリブ研究からの視点」『京都文教大学紀要 人間・文化・心』1:111-136.
- 関礼子, 1999, 「水俣病差別とニセ患者差別」飯島伸子・船橋晴俊編『新潟水俣病問題—加害と被害の社会学』東信堂.
- 菅原和孝, 1993, 『身体的人类学—カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』河出書房新社.
- 高田昭彦, 1998, 「市民運動から市民活動へ、そしてNPOへ—NPO法案を生みだした市民運動の新しい展開」『アジア太平洋研究』16:95-116.
- 鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践』有斐閣.
- 鳥越皓之編, 1989, 『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房.
- 鳥越皓之・嘉田由紀子編, 1984, 『水と人の環境史—琵琶湖報告書』御茶の水書房.
- 鶴見和子, 1983, 「多発部落の構造変化と人間群像—自然破壊から内発的發展へ」『水俣の啓示（上）』筑摩書房.
- 脇田健一, 1996, 「京都大文字山ゴルフ場反対運動における住民運動・市民運動・自治会」『仏教大学総合研究所紀要』3:184-201.
- Williams, Raymond, 1977, *Marxism and Literature*, Oxford University Press.

(まつむら・かずのり)

1999年5月14日受理、1999年5月28日掲載決定

REVITALIZATION AND CONSERVATION IN THE MOUNTAINOUS AREA: A FIELD WHERE A “STRANGER” AS A SCHOLAR CREATES THE “OPEN CULTURAL SPACE” WITH LOCAL PEOPLE

MATSUMURA Kazunori

Institute of Health & Sport Sciences

UNIVERSITY OF TSUKUBA

1-1-1 Tenno-dai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8574, JAPAN

Recent studies in Environmental Sociology in Japan have shifted their foci from the various pollutions and (other) environmental problems to the conservation of everyday life. Along with the focal shift, methodologically, it is increasingly unsatisfactory to merely look on the practices of life of local people. In this paper, I offer an alternative perspective on the concept of stranger that aims to objectify the research agent while relying on self-evident attributes that reside in his/her own body. This perspective brings us the dynamic inter-play in “Open Cultural Space” (Mandle and Mandle, 1990; Williams, 1977) among three types of agents: the local people, those strangers who moved in and permanently settled in the locality, and those strangers who have their permanent residence elsewhere. In short, researchers who share concerns for the revitalization of the depopulated area can reach the task by elucidating “tactics” of as opposed to “strategy” (Michel de Certeau) or bricolage (Lévi-Strauss) of the local people.

To illuminate my conceptual argument, this paper presents a case of local conservation movement in the Minami-Aizu region in Fukushima Prefecture, Japan. By examining a series of events and discourse of various agents in the recent movement, I discuss the roles of the key players in the interplay and its implications to their cultural space. In summary, it has become clear that the element of “play” is critical in the process of the cultural space creation as well as in the practical pursuit of the conservation movement in the locality.

Keywords and phrases: revitalization, conservation, “stranger,” “open cultural space”

(Received May 14, 1999; Accepted May 28, 1999)